

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02365

研究課題名（和文）近世・近代日本における中国古典詩の受容とその社会への影響についての研究

研究課題名（英文）Social Significance of Sinitic Poetry in Early Modern and Modern Japan

研究代表者

合山 林太郎（Goyama, Rintaro）

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：00551946

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世・近代の日本において、古代から明清時代までの中国古典詩がどのように受容されたかについて、詞華集や注解書、初学者向けの韻書、作法書など、様々なタイプの資料を用いながら考察した。また、併せて、日本人が作った漢詩（日本漢詩）に関しても、その評価のあり方などについて分析し、中国の詩と日本の詩とが、いかなるプロセスを経て、江戸・明治期の人々の教養を形成していったかを明らかにした。なお、考察にあたっては、漢学者や専門漢詩人だけではなく、政治家や医者など、社会の様々な領域に存在していた漢詩愛好者の活動に目を向け、近世・近代の漢詩文化の全体像について把握することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近世・近代日本における漢詩の受容・評価のあり方について、作品レベルで明らかにしてゆくものである。こうしたそれぞれの時代の社会が持つ漢文学に関する知識や教養についての実証的な検討は、江戸・明治期の日本漢文学研究に、新たな認識をもたらすとともに、漢詩と関わりのある、様々な領域の事象の分析にも資するところがあると考えられる。また、本研究では、重要な歴史人物の漢詩について、新たな解釈を提示しており、さらに、漢詩詞華集をはじめとして、これらの人々と関係する多くの資料についても考察を及ぼしている。その成果は、歴史研究の領域においても活用し得ると考える。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to explore how Japanese in the late Edo and Meiji periods, that is, the 19th and early 20th centuries, developed knowledge on Sinitic prose and poetry.

Sinitic literature, including classical Chinese literature and Chinese-style works written by Japanese, formed a part of the basic knowledge of intellectuals from various occupations at that time, because of the educational system in clan schools and private academies, which emphasized the value of Chinese classical learning.

This study clarifies how people in the Edo and Meiji periods learned and absorbed knowledge on classical Chinese poetry by analyzing anthologies edited and printed in Japan. Information on the pieces of work that Japanese editors considered important can be obtained by examining their contents. A precise picture of the reception of Chinese literature can reveal the necessity of partly renewing the current description of the history of Sinitic literature in Japan.

研究分野：日本文学

キーワード：漢詩 詞華集 アンソロジー 東アジア 教科書 唐 宋 古典

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今日、近世・近代日本漢文学研究は活況を呈しているが、その多くの部分は、1960年代の先駆的な研究によって切り拓かれたと言ってよい。たとえば、富士川英郎『江戸後期の詩人たち』(1966)は、写実性や抒情性の点から詩を評価し、後の近世漢詩研究に大きな影響を与えた。また、松下忠『江戸時代の詩風詩論 明・清の詩論とその摂取』(1969)は、明清時代の格調(古文辞派)・性霊・神韻の三詩説によって、江戸時代の漢詩史の概要を示そうとするものであり、以降の漢詩史の記述も、この枠組みを用いたものが多い。

これらの研究は、国際的にも大きなインパクトを残しており、富士川氏の研究は、今日においてもしばしば引用される Burton Watson “Japanese literature in Chinese” (1975-1976)においても参照されている。また、松下氏の著作は、その中国語訳である『江戸時代の詩風詩論 兼論明清三大詩論及其影響』(范建明訳、2008)などを通して、東アジアの諸地域において読まれるようになった。

このほかに、漢籍輸入や和刻本刊行についての分析や、漢詩人についての実証研究なども行なわれ、様々な知見が蓄積されているが、いくつかの問題点がないわけではない。

たとえば、日本における、中国の詩の受容や評価の歴史について、客観的な分析がなされていない。近世・近代、それぞれの時期で人々の基礎教養となったのは、どのような詩なのか、具体的に言えば、どのような詩が詞華集や詩話などで取り上げられ、人々の目に頻繁に触れていたのか、これは、日本の漢詩文化を考える上で基礎的な問題と考えられるが、網羅的な調査が行なわれた形跡はない。

なお、詩論のレベルで、いかに日本人が中国古典文学を学んだかについては、先に見た松下氏の著作を含め、多くの論考がある。しかし、たとえば、荻生徂徠の一派が流行させた『唐詩選』が、彼らの勢力が詩壇から退潮して以降もひろく読まれたように、どの詩論あるいは詩人が支持されたかということ、どの作品が人口に膾炙するかということとは、必ずしも同じではない。

また、漢詩についての分析が、専門的な漢詩人の作に偏っている点も大きな問題であろう。19世紀以降、藩校や私塾の発展に伴い、多くの人々が漢詩文制作の習慣を持つようになった。志士や政治家・官僚、実業家がそれぞれの営みの中で、中国の詩を学び、自らも漢詩を制作し、自身の思想や信条などを主張したが、彼らの作品については、なお多くの実証的な検討を行う余地が残されているように思われる。

これは言い換えるならば、富士川氏のように、自身の主観により、近世の漢詩を評価し輪郭を与えるのではなく、この時期の漢詩文化の総体を、それが持つ多様性に目を向けつつ、考えてゆくということになるだろう。

学問や古典研究の背景にある、時代特有の評価のまなざしを客観的に検討しようという動きは、たとえば、井田太郎・藤巻和宏編『近代学問の起源と編成』(2014)の刊行に見られるように、近年においても盛んである。日本漢文学の領域においても、こうした先行研究の恩恵を受けつつ、総合的な考察を行う必要があるだろう。

また、2014年から3年間実施された国文学研究資料館の公募共同研究「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」において、申請者は、近世日本漢詩の後代における受容のあり方について、館柳湾などを例に、その一部を明らかにした。こうした成果に、中国古典詩の受容に関する知見を付け加え、近世以降の日本における漢文文化の全体像を示すことが期待されていた。

2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、以下の5点である。

(1) まず、近世・近代日本において、漢・魏・六朝から明・清にいたるまでの中国の古典詩が、どのように受容されたかを分析する。分析に際しては、とくに個々の作品がどのような媒体に掲載され、いかなるかたちで読者と接点を持ったかという点を重視する。すなわち、専門漢詩人や漢詩壇を主要な考察対象とする従来の分析と異なり、アマチュアの漢詩愛好者の漢詩学習についても視野に入れつつ、考えてゆく。

(2) 日本の漢詩についても、近世・近代のそれぞれの時期において、高い評価を得た詩は何か、そして、それがいかにして可能になったかを検討する。

(3) 政治家や官僚、医者などの漢詩愛好者についても、彼らがどのような状況でいかなる意図とともに詩を制作していたについて分析を行う。その際、とくに漢詩の贈答に注目し、詩が、他の詩歌形式と比較して、社交のためのツールとして、どのような特性を持っていたかについて検討してゆく。

(4) 中国の詩文は、必ずしも文学的な関心からのみ日本人に受容されたわけではない。たとえば、アヘン戦争の状況を描いた詩集『乍浦集詠』が幕末の日本で熱心に読まれたように、中国の詩は、様々な事件や事象を伝える、いわば情報源としても機能していた。また、各地の名所を詠った近世日本の漢詩は、地誌に収録され、その場所のイメージを伝えている。これらの作品を対象として、歴史や地理、文化に関するイメージ・表象を探求するための資料として、漢詩が持つ可能性について検討する。

(5) 上記の分析より得た知見を統合し、近世・近代の日本における漢詩文の教養の内容と、それが果たした社会的な役割について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の手法は、次の5点に要約できる。

(1) 中国古典詩に受容状況については、別集及び総集(詞華集) 詩話、韻類書、初学者向けの作法書を調査した。近代以降に関しては、さらに新聞や雑誌、解説書、教科書などを分析の対象に加え、検討を行った。収録作品をリスト化して分析し、とくに詞華集に注目し、編者がどのような漢籍を見ていたか、どの詩を収録のために選択したかを析出した。また、作品への注記や解説などから、どの書籍を参照していたのかを明らかにした。

(2) 日本の漢詩に関する情報の流通についても、総集、別集、詩話、韻類書などにどの詩が掲載されているかをデータ化して分析した。ここでも詞華集に注目した。詞華集には、それに載ることによって、詩が知られるようになるという場合と、元々有名な詩であったから詞華集に収録される場合とがあるが、それぞれの資料の編纂の目的や背景を見極めつつ、作品が掲載されることの意味について考察した。

(3) 詩文を發表することが生業である専門漢詩人などと異なり、政治家や医者、学生などは、稿本や書幅などのかたちで詩を残すことが多く、詞華集や詩話、新聞や雑誌などの公刊資料に掲載されるのはその一部である。彼らの詩を可能なかぎり収集し、どのような環境でそれが作られたのかについて、伝記などと照合しながら検討した。

(4) 海外の事件の中でもとくに漢文文献が豊富な壬辰戦争(文禄・慶長の役、壬辰倭乱)について詠った邦人の漢詩を調査し、作品に描かれた戦争のイメージを分析した。また、江戸の地誌に引用された名所を取り上げた近世日本の詩を讀解し、近世・近代の隨筆などとの関連について検討した。

(5) それぞれの時期によって、中国古典詩、日本漢詩の受容・評価のあり方、また両者の関係性がどのように変化するかを分析した。また漢詩に携わる人々の多様な動きを整理し、漢詩文化全体を構造的に把握した。

4. 研究成果

上記の研究の結果、以下のような知見を得た。

(1) まず、中国の詩の受容については、『唐詩選』などの近世以降、ひろく流布した詞華集によって学ばれた面が大きい。また、『唐宋詩醇』などの大部の総集も詞華集編纂の際には参照されている(『和漢名詩類選評釈』 1915 などの記述による)。このほか、詩文集のほかにも、韻類書や初学者のための作法書に詩が作例として掲載されており、これが、近世日本における漢詩の教養の形成に重要な役割を果たしていたと考えられる。その上で、詞華集や韻類書における詩の収録状況を仔細に検討すると、そこからは、従来の文学史的な理解とはやや異なる中国古典詩の受容のあり方が見えてくる。たとえば、通常、文学史においては、近世後期においては、袁宏道をはじめとする明末の詩人の強い影響を受けた清新性靈派の詩人が退潮し、それまで荻生徂徠一派が高く推奨してきた明代古文辞派の詩人の作に支持が集まらなくなったと言われる。しかし、初学者向けの作例書への作品の収録状況をみると、古文辞派の詩は、江戸後期以降も散見するのに対し、袁宏道の作品は、ほとんど見当たらない。あるいは、沈徳潜『明詩別裁集』などの評価が影響を与えたかとも考えられるが、漢詩壇とはやや異なる考え方が、こうした通俗的な書籍には流れていたようである。このほか、南朝宋の詩人謝靈運についても、『玉台新詠』に収録される「東陽溪中贈答」詩が、近世日本の詞華集で取り上げられるなど、今日とは、相当異なる評価がなされていたことが分かる。

(2) 日本の漢詩についても、それが人々に知られるようになる過程では、詞華集が重要な役割を果たしている。このことは、たとえば、頼杏坪の「江都客裏雜詩」詩が、自身の詩集『春草堂詩鈔』(1833)には収録されていないにもかかわらず、『文政十七家絶句』(1829、文政年間(1818-1831)に著名であった17名の詩人の絶句を集めて刊行された詞華集)に掲載されたため、杏坪の代表作として、後代の詞華集に多く掲載されている(『和漢名詩鈔』 1909 など)ことから明らかである。近世後期以降、広く読まれた詞華集としては、商業的にも大きな成功を収めた元号絶句集(元号を書名に冠している、『文政十七家絶句』はその最初のものである)と呼ばれる資料群や、江戸・明治初期に多数刊行された初学者向けの通俗的な詞華集の類を挙げることができる。とくに後者については、今回、正岡子規の漢詩ノート『隨録詩集』(法政大学図書館及び国会図書館蔵)中には、この種の詞華集からの抄出と認められる箇所がある。具体的に言えば、子規のノートには、詩の配列や字の異同等で、『日本名家詩選』(1775)及び『才子必誦崑山片玉』(1875)と多くの一致点を見出すことができる箇所がある。手近に入手できるこうした通俗的な詞華集は、ある意味、詩人の別集などよりも、その詩が社会に伝播する際に、強い影響力を持っていた可能性があると言えよう。

(3) 志士・政治家の詩については、西郷隆盛の詩が、明治初年の詞華集や新聞・雑誌に掲載されており、これらの詩が、西郷のイメージ形成に寄与している点が興味深い。また、詞華集『古今名家詩鈔』(1877)に掲載された宮島誠一郎の詩には、征韓論に敗れ、東京を退去する際の西郷の意図や政治的立場について示唆を与える情報が含まれており、歴史資料としても意味がある。医者の詩作活動については、浅田宗泊や坪井信道、緒方洪庵らの漢詩との関わりについて調

査したが、彼らの多くが、自身の志や学統の精神を提示する際に漢詩を制作しており、漢文学が、幕末期の学舎の経営に不可欠であったことが分かる。なお、夏目漱石の漢詩についても考察したが、漱石の詩は、上記のいずれの潮流にも属さない、自らの内面世界を強く投影した、独自のものである。ただ、20歳代前半の作は、頼山陽などの詩との表現の類似性が見られるなど、当時の学生の詩とそれほど差異のないものである。こうした前提を踏まえつつ、漱石の詩風の変化の背景を探っていくことが重要であると考えられる。

(4) 海外表象や都市文化について考える上でも、漢詩は有用な資源と言える。たとえば、壬辰戦争を題材とした詩は、荻生徂徠、菅茶山、大窪詩仏、小野招月ら多くの人々によって作られており、これらの詩を読解すると、『懲毖録』や『征韓偉略』(1831)などの漢文の著作が彼らに強い影響を与えていたことが分かる。このうち、徂徠の「寄題豊王旧宅」詩は、詞華集に多く収録され(『近古詩鈔』1873、『才子必読 皇朝精華集』1875 など) 広く知られていた。また、服部南郭や大沼枕山ら、近世の漢詩人の江戸の名所を詠った詩の幾篇かは、近世・近代の地誌に掲載され、人口に膾炙していた。近代の作家永井荷風が、これらの詩を、昔日の江戸の描写する際に巧みに引用し、市中の風情を知るために活用していた。

(5) 近世・近代の日本においては、中国、日本の詩作品が、別集・総集、韻類書、作法書、新聞雑誌など、様々な経路で中国・日本の漢詩についての情報が流れており、アマチュアの漢詩愛好者たちは、こうした環境の中で、詩作についての知識を身につけていった。専門漢詩人などの、流行に敏感に反応する層の動きとは異なり、彼らの間では、時々的好尚を反映しながらも、漢詩について一定の教養の枠組みが形成されつつあったように思われ、その一つの完成形が、中国の古典詩と日本の漢詩とを、バランスよく学ぶという形態であったと考えられる。簡野道明『和漢名詩類選評釈』(1915)など、中国・日本の詩を併録するタイプの詞華集は、その象徴的な存在であると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 240
2. 論文標題 謝靈運「東陽溪中贈答」と近世・近代日本の漢詩人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 218-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 117
2. 論文標題 加藤王香編『文政十七家絶句』の成立過程とその後世への影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 205-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 229
2. 論文標題 西郷隆盛の漢詩と明治初期の詞華集	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学「文化装置としての日本漢文学」	6. 最初と最後の頁 144-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 梅辻春樵 妙法院宮に仕えた漢詩人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化史のなかの光格天皇（飯倉洋一・盛田帝子編、勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 274-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 文人の「会」や交流 2 - 近世・近代前半の詩会・詩社	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本「文」学史 2	6. 最初と最後の頁 339-349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎 (韓国語版: 宋好彬氏訳)	4. 巻 48
2. 論文標題 松下忠氏『江戸時代の詩風詩論』と江戸時代漢文学研究の現在	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 漢文学論集 (韓国・権域漢文学会)	6. 最初と最後の頁 35-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 113-1
2. 論文標題 正岡子規が読んだ江戸漢詩詞華集: 『才子必誦 崑山片玉』及び『日本名家詩選』について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 230-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 漱石の漢詩はいかに評価・理解されてきたか? 近世・近代日本漢詩との関係性に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 漢文脈の漱石	6. 最初と最後の頁 48-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 大槻磐溪と福澤諭吉 いわゆる「楠公権助論」をめぐる応酬について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 幕末明治 移行期の思想と文化(前田雅之・青山英正・上原麻有子編)	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合山林太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 近世漢詩に描かれた壬辰戦争	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近世日本の歴史叙述と対外意識(井上泰至編)	6. 最初と最後の頁 459-477
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 明治期の日本において漢語や漢詩文が持っていた社会的意義
3. 学会等名 知識人文学国際学術大会・口訣学会国際学術大会「知識人文学の研究と漢語の受容」（檀国大学校）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 江戸時代の日本における漢詩文化：富士山を詠った詩を例に
3. 学会等名 第15回海外学者招聘セミナー（釜山大学校）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 文人交流與書籍收購：日本漢詩人野口寧齋與清末中國（黃美娥氏によるパネル「人・物・文 二十世紀前後中、日漢文學的越境交流與互相傳播」の中の発表）
3. 学会等名 2019中央研究院明清研究國際學術研討會（中央研究院）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 The Names of Native Flowers and Sinitic Poetry in Early Modern Japan: Focusing on The Relation with Knowledge in The Field of Herbal Medicine (Matthew Fraleigh氏によるパネル"Japanese Sinitic Poetry as Exophonic Literature"の中の発表)
3. 学会等名 World Literatures and the Global South Conference (The University of Sydney) (國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 近世・近代の漢詩文における江戸の 名所 と 風景
3. 学会等名 シンポジウム「追憶のなかの 江戸」（法政大学江戸東京研究センター）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 明治人は淡窓のどの詩を好んだか 近代の漢詩詞華集の分析を通して
3. 学会等名 淡窓研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rintaro Goyama
2. 発表標題 How Did Early Modern Japanese Poets Understand “Innate Sensibility?”: The Reception of Yuan Hongdao by Yanada Zeigan (Wanning Wang氏主宰のパネル“Xingling (Native Sensibility) after Yuan Hongdao: The Inheritance and Innovation of Classical Chinese Poetics in Early Modern China and Japan”の一部として)
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan (ASCJ2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 戦前までの日本漢詩についての教養と今日の国語教育 江戸・明治期の漢詩詞葉集から考える
3. 学会等名 第34回全国漢文教育学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 近世日本における袁宏道受容史の再検討：詩を中心に(袁宏道對江戸時代日本文人影響の再考察：以詩為中心)
3. 学会等名 第二屆南京大學域外漢籍研究國際學術研討會(國際學會)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 野口寧齋と在清日本人のネットワーク：文廷式との交流・蔵書形成
3. 学会等名 第10回和漢比較文学会海外例会(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 教養としての日本漢詩：戦前までの伝統をふり返る
3. 学会等名 公益財団法人無窮会九月例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 国際化する日本漢詩研究：現状と展望
3. 学会等名 第5回海外著名学者招請講演会（韓国・成均館大 東アジア漢文学研究所）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 近代日本における漢詩詞華集とその文学史的意義
3. 学会等名 Loose Canons II: Value and Valuation in Japanese Engagements with Chinese Writing（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 近世後期日本漢詩文における台湾の表象 イメージ
3. 学会等名 第二屆文化流動與知識傳播 臺灣文學與亞太人文的多元關係 國際學術研討會（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 毛利貞斎『古文真宝後集合解評林』について
3. 学会等名 「日本の近世における中国漢詩文の受容 三体詩・古文真宝の出版を中心に」公開研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 近世日本漢詩文研究から見た韓国漢文学の意義
3. 学会等名 槿域漢文学会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 蔵書を用いた漱石漢詩読解の試み 『漾虚碧堂図書目録』所載文献に焦点をあてて（パネル報告）
3. 学会等名 シンポジウム「漢文脈の漱石」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 Vocabulary-Building by Kanshi Poets During the Late Edo Period (パネル "The Local and the Global in Early Modern Japanese Kanshi" 中の報告)
3. 学会等名 Early Modern Japan Network (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 町泉寿郎編 / 梶谷光弘、加畑聡子、坂井建雄、吉田忠、中村聡、佐藤賢一、合山林太郎、清水信子、渡辺浩二、松村紀明、小曾戸洋、W・エヴァン・ヤング、武田時昌、郭秀梅、川邊雄大	4. 発行年 2020年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 284
3. 書名 講座 近代日本と漢学 第3巻・漢学と医学（担当範囲：第3部第2章「医者と漢詩文 江戸後期から明治期を中心に」）	

1. 著者名 合山林太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」	5. 総ページ数 35
3. 書名 大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』	

1. 著者名 松田浩、上原作和、佐谷眞木人、佐伯孝弘編 / 佐々木孝浩、荒木浩、伊藤慎吾、玉城司、杉田昌彦、小林ふみ子、柳沢昌紀、飯倉洋一、佐藤至子、阪口弘之、武藤純子、山本秀樹、西田耕三、横山泰子、合山林太郎他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 古典文学の常識を疑う : 縦・横・斜めから書きかえる文学史（担当範囲：「幕末漢詩における政治性とは何か」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----